

ある日の人妻と間男



ムハキヤ



「あっ……だめっ！」

隣の部屋にあの人が……」

「はあはあ、あいつは酒吞んで寝たら簡単には起きないよ」

「もう……こんな関係は終りにしましょう……」

「本当に嫌なら僕を突き飛ばして隣の部屋に駆け込めば良い。全てが終わるだろう？」

はあっ

あっ



「はあ…君の胸は本当に
いいもみ心地だ」

「あっ…だめっそんなこと
してはだめ……はっん……」

「そんな甘い声で抵抗
されて我慢できる男が
いると思ってるのかい？」
「はっ……ああんっ」

ぶるん

ぐ
い
ぐ
い

ん



「ほら、僕の興奮がわかるだろう」

「やあ…お尻に硬いのがあたって…脈打ってる」

「どうして欲しい？」

「それは…その」

「言えないの？では、直接見せてあげれば踏ん切りが付くかな」

あんっ

ぐいっ

ぐり

ぐり

はあ



「あぁっ……ち○ぽが
びくんびくんしてるっ」
「君に入れたくてこんなになっ
ちゃってるんだ」
「れ……て」
「なにかな」
「……ぽ……れて」
「なに？はつきり
言わなきゃ帰るよ？」
「入れて！あなたの
ち○ぽを突き刺してっ！」

ぶるんっ

はっ

はっ

はぁ



「はあああっんっ…ち○ぽ
きたああっ！」

「はあっはあっ……」

「これ…欲しかったのっ
ずっと待ってたの……」

「あっんっはあっ！」

「よしよし、ようやく
素直になったな」

「ああ……ごめんなさー」

「あー」

ズチュッ

ズ
ズッ
ズッ

ズブッ

やんっ

あんっ



「お願い……私の中に
注ぎ込んで……」

「いいのかい？」

「うん……安全日だから
思いっきり……はっあっ……
出して……」

「ああ、たっぷり注いで
あげるよ」

「あんっああ……っはあっ」

「うっくっ……そんなに
しめつけられるとっ……」

「出してっどびゅどびゅ
してっお願いっ！」

やんっ

あんっ

あんっ

ビクッ

ドキュ ドブッ

フブッ

ズッ



「出るっ出すぞお！」
「はあああっ！熱いっ
精液きたあっ！」
「くうおお、搾り取られる」
「はあんっ…ああんっやんっ」
「ううふうう！」
「ああん……はあ……ん」

あ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ドッ













